

## 将門伝説の岩井市と同名姉妹都市八千代町を訪ねて

蕨 由美

### 1 「下総」と将門伝説

平将門を人は「伝説の鎧を着た武士」という。都心のビル街に「首塚」や「兜神社」そして「神田明神」があり、また、遙か秩父の城峰山に「将門の隠れ岩」があった。今も怨霊として生きる伝説の主、その存在は北総の地に住んで、より一層身近に感じられる。古代遺跡の下総国府の近く、国道14号を挟んで市川市役所向かい側の鬱蒼とした藪がある。この誰も入ってはいけない「八幡の<sup>やぶしらす</sup>不知森」のいわれの一つにも、将門にまつわるタブーがあるという。

手賀沼のほとり、日秀の将門神社、沼南町岩井の将門を供養する地藏堂を祀る村の人人は、今も将門を調伏した成田山にお参りをせず、将門の愛妾桔梗御前の裏切りを恨み、桔梗も植えない。

中世城跡の、千葉氏が居城とした猪鼻台の今は千葉大医学部の構内にある七天皇塚は、将門の七人の影武者を祀るといふ。

大佐倉城跡の台地の一角、将門を祀る「口の宮明神」は、佐倉惣五郎の怨霊伝説「地藏堂通夜物語」の最初の舞台として登場する。時の権力者に破れて怨霊となった古代の「謀反人」将門と近世下総の義民佐倉惣五郎に、伝説の語り部はどんな思いを重ねたのであろうか。

聞くところによれば、平将門は下総の石井・鎌輪を根拠地にして、関東の覇者となって常陸・上野の国府を襲い、転戦の後、石井の地に敗れた。この「石井」は今は茨城県の岩井市、「鎌輪」はその北の千代川町付近に比定されるという。この一帯は鬼怒川と利根川の流域で、湖沼と台地の織りなす地形と河川交通の実態から見て、名実共に「下総国」であったが、近代に入って東遷された利根川を県境としたことにより、今は茨城県となっている。

今回は、八千代市教育委員会のバスをお借りできるというまたとない機会であったので、将門ゆかりの岩井市と我が市と同名姉妹都市である八千代町を巡り、かつての「下総国」に、将門伝説の実態を探る小旅行を企画した。

## 2 結城郡八千代町の歴史民俗資料館を訪ねて

朝から小雨の肌寒い日だったが、会員23名、共催の文化財保護の会会員5名、一般の方7名の計35名が、平成9年3月16日8時半勝田台から八千代市の「わかば号」に乗り、結城郡の八千代町と岩井市を訪ねた。

国道16号線を北上、野田市で右折、谷津田と果樹栽培の台地を貫く県道を走り、岩井を過ぎて八千代町へ。「県立八千代高校」「八千代郵便局」など我が町と錯覚しそうな看板を見ながら「八千代町歴史民俗資料館」に着き、早速見学する。入口に立つ「新長谷寺観音堂」の美しい御前立ちの観音が私たちが迎えてくれた。結城朝光ゆかりの貴重な鎌倉彫刻である。

昭和30年、5か村合併により結城郡八千代町となったこの町は、前年に町村合併促進法により同じく「八千代町」となり、後に市となった我が八千代市と名前だけでなく、その風土や歴史も不思議なくらいよく似ている。

沼と谷津、台地からなる地形と、そこに営まれた古代からの生活と産業に大きな共通点があるからだろう。古代において、湖沼と深く入り込んだ谷津に囲まれた台地は、農耕よりは馬の放牧に適するため官牧が置かれ、八千代市では「高津牧」、八千代町では「大結牧」、岩井市には「長洲牧」があった。

後に、下総は伊勢神宮の神領として、相馬、夏見、遠山形、葛西猿股、萱田神保の5か所の御厨が置かれている。相馬は手賀沼の北側一帯にかけて、萱田神保は八千代市付近であろう。

班田や公領、官牧も律令制から王朝時代末期になると、私有化が進み、国司として下向した皇胤貴族の子弟が在地実力者に婿取りされることにより、土豪が源・平・藤・橘の名家に塗り代わっていく。母方から相馬の地を継いだらしい「相馬二郎平将門」は、官牧大結牧と長洲牧の牧司として、承平5年(935)八千代町で起こった野本の合戦に登場してくる。

この館の重要な展示の一つは、「尾崎前山遺跡」の製鉄炉跡の出土品と復元模型である。この遺跡は、飯沼から入り込んだ谷津を望む台地の南斜面に築かれた製鉄炉と台地上の住居、工房跡からなり、同町教育委員会の調査では9世紀に操業された「竪型炉」であるという。ふいごによる「たたら製鉄」ではなく、地形を利用した自然送風により、鬼怒川から採れる砂鉄を還元し、農具、馬具、武器類を作ったのだろう。

関東の馬と鉄の二大産業が将門の勢力を支えた基盤であると、福田豊彦氏はその著書で述べているが、その説の裏付けとなる貴重な発掘成果である。

近世では、飯沼など沼沢地の新田開発の資料がメインで、天保の印旛沼掘割工事を彷彿とさせる展示であった。大規模な新田が開かれても、水害や干ばつにより豊かな稔りが決して保証されない時代に、人々は何に祈ってきたのだろう。幕末の資料としては天狗党に参加した大久保七郎左エ門の「真菅日記」が、急雲を告げた時代を表していた。

### 3 八町の新長谷寺に参拝

午前中時間に余裕があったので、「新長谷寺」を拝観した。貞永元年結城朝光創建と伝



えられるこの寺院は、兵乱で堂宇を失い、享保21年に建てられた観音堂が真言密教のスタンダードなたたずまいを今に伝えている。

御前立ちの観音像は、先ほど資料館で拝観したが、結城朝光が鎌倉から持ち帰ったという十一面観音は、秘仏として今も本尊として収まっております。関東88霊場として庶民の信仰も厚いら



新長谷寺観音堂

しい。かつて八町四方の境内を持っていた故に地名を「八町」という寺院だが、今は、朝光手植えという銀杏の雄々しい姿に中世の余韻を感じさせてくれる史跡であった。

#### 4 馬牧と製鉄遺跡の地を通して

八町の新長谷寺を後に、バスは八千代町の北から県道結城・岩井線を南下して行く。途中「大間木」の地名表示を過ぎた所で停車し、車窓から林を囲った柵と看板を見る。飯沼新田開発の旧家、秋葉氏の邸宅の一部で、二重の土塁と背後に入沼、前方に村落を配した中世領主の館の面影をとどめるという遺構である。また、この秋葉家の西、旧道の向こうに「館出」という2キロに及ぶ土塁があり、大間木と称するこの一帯は古代の大結牧と比定されるらしい。

バスは、すぐに小さな谷津を渡る。バスでは入れないが、この谷津沿いの辺田道を少し行くと、尾崎前山遺跡があるという。

飯沼新田を渡り、岩井市に入って、将門を祀った「国王神社」にバスを止める。

#### 5 岩井の将門史跡を巡る

天慶の乱、それは平安時代の935年、東国の平氏一族の私闘に端を発し、平将門による下総、常陸、上野国府占領の反乱に発展し、時の朝廷を震撼させた事件であった。その闘いの物語は940年の将門非業の死の直後、あるいは、その後10年後に書かれたという『将門記』につぶさに述べられている。

『将門記』の「石井の営所」、そして将門敗死の「北山合戦」の地は、岩井の「国王神社」とその周辺であるという。その地はのどかな田園の中にあった。「国王神社」は、将門の三女



国王神社

・如蔵尼が父の33回忌の供養に像を刻んで祠に祀ったのが創始とされ、今の社の本殿は、1683年の建立である。拝殿は1817年の再建で、茅葺きの屋根の反りが古びた中にも優美な趣が感じられた。

境内に、織田完之と赤城宗徳の筆になる二つの将門を顕彰する石碑がある。織田完之は、明治のころ将門記の研究から「濡れ衣を着せられた将門」の汚名を濯がんと裁判に訴えようとし、政治家の赤城氏は、戦後に政治追放されたころ郷土と将門の研究に没頭した。両氏の将門に寄せる思いが凝った碑ともいえる。

県道を渡り、「石井の宮所跡」の碑を見る。菅生沼を望むこの台地を「島広山」という。平将門がNHKでドラマ化された記念に、この伝承の地には石碑が建ち、小公園に奇麗に整備されていた。

宮所跡の奥には、かつての宮所の守護神として創建された「一言神社」がある。喉がかわいた将門に一人の翁が石を打ち込んで泉を湧き出させ、水を飲ませた伝説の翁を祀るという。

島広山の台地を下りると、その裾野に将門が喉を潤したという「石井の井戸」の記念碑があった。今は枯井戸になってしまっているが、ここもドラマ化のときに整備され、「石井」の地名の由来を教えてくれている。恐らく飲料用の井戸というよりは台地の裾野からの湧き水を利用した谷津田開発の起源伝承かもしれない。

その先の田んぼの一角に「延命寺」がある。この寺の本尊は、将門の守り本尊薬師如来と伝えられ、「島の薬師」と近隣の人々に親しまれているお寺である。中世には、相馬氏の菩提寺でもあり、茅葺の山門が見事であった。しかし、本堂は1844年に消失し、今は仮の薬師堂で、そのたたずまいは、その礎石に比べ寂しいものであった。

近くには将門の胴体を葬った「神田山延命院」や「富士見の馬場」などの史跡もあるが、時間の制約もあって帰路につき、予定どおり4時30分勝田台に帰った。

## 6 「将門記」を読んで—天慶の乱とその後

10世紀は、謎の時代であるともいう。関東は、東北支配の前線基地としての役割が重く、中央からのくびきも強かった。俘囚の反乱、そして早くから進んだ田畑や官牧など公有の生産財の旧豪族による私有化、その相続をめぐる相婿・叔父・甥の争い。血統においては、貴種男系を標榜しつつ、実態は招婿婚による女系相続が、彼らの利権を更に複雑にしている。王朝文化が花咲こうとする平安京とまったく異なる世界が、坂東には

あったのだ。

軍記物語の祖といわれる『将門記』は、紛争の原因や経過において将門に同情的であり、また、将門らを通じて「つわもの」への憧憬の念も寄せている。しかし、そこにはまた、未だ中世に程遠い古代的な闘いの姿もかいま見ることができる。隷属させられた農民が根こそぎに動員され、双方の根拠地の灰燼に帰するまで焼き尽くし、戦禍は民衆にとってこの世の地獄である。このような惨状を『将門記』は、強く糾弾し、神罰により敗死した将門を冥界で92年の地獄の責め苦に処している。

『将門記』の著者の意に反して、天慶の乱鎮圧後も、関東には争乱が絶えなかった。将門の首級を挙げた平貞盛・藤原秀郷が覇権を握った後、11世紀初頭には将門一族の良文の系譜をひく平忠常が房総全土を席捲した。この時房総三国は「亡国」と化し、不毛の荒野となったという。

兵農分離した新しい中世武士像と、所領の生産性を失わずに戦う戦闘方法が確立していくのは、この焦土の復興の中からであり、12世紀に入って忠常の子孫千葉氏の時代になってからである。しかし、この武士の誕生とその政権が近世まで続いたその後の日本史を鑑みると、野口実氏（中世史家）の「武士（＝職業的殺し屋）を肯定する風潮の克服こそ日本社会の近代化に資するもの」という提言を深く受け止めざるを得ない。

## 7 伝説の行く末

今回の旅は、下総の地域史を知る上に欠くことのできない将門伝説の本拠地を訪れ、収穫の多い小旅行であった。将門に寄せる岩井の土地の人の思いは優しく、今も「国王大神」の掛け軸に向かい、十四日講という将門供養の集いが行われているという。

たくさんの将門伝説の由来について逐一考察するスペースはないが、伝承はそれが語られる語り手の時代と地域とを映しているのだと思う。

乱の最中には、神社仏閣に将門調伏を願い、将門の首が京で獄門にかけられると、今度は祟りの出没に恐れおののいた。その伝承の姿は「もののふ」に恐怖して、ありとあらゆる手段で将門を死に追いやった古代平安京の人々の心そのものであり、道真伝説より遥かに強烈である。

その京から、はねられた将門の首が身体を求めて空を飛ぶという伝承が、不破の関を通り、東国へ至る道筋に転々と連なっている。まさしく「恐怖の伝承」が人々の口を介し、東へと飛んだのである。

『将門記』のエピローグである「冥界消息」において、将門は殺生の罪で地獄に落とされた。その将門も92年後には、生前にお経を書写したという功德により、その責め苦から救われたと記されている。さらに、12世紀になって、今昔物語の中では、将門の娘の如蔵尼や孫の蔵念が深い地蔵信仰によって父や祖父の罪業から救済され、聖女聖人のように崇められている。将門とその末裔に時が許しを与えたのであろう。

将門と妙見大菩薩の出会いの伝承や、7人の影武者と桔梗御前の伝説は、平良文にルーツを置く下総一帯の千葉氏、相馬氏の古蹟に大変多い。「妙見信仰」に将門への親近感をからませて、一族の系譜を主張したかったに違いない。

鎌倉幕府と江戸幕府の開府によって、ようやく東国は地域として自立を成し遂げる。「新皇」を語った謀反人も、東国武士や江戸っ子の「英雄」となり、時には「怨霊」に先祖帰りをしながら、施政者への批判の布石として存在し続けた。神田明神の賑い、そして大佐倉将門山には、佐倉惣五郎刑死の翌年に、藩主堀田正信が寄進した石の鳥居が未だ古びずに立っている。

現代においても、ビルの谷間の首塚は、明治期と戦後の崇りの怪奇談を伝え、また、三里塚空港の建設地にもその亡霊は現れたという。

旅の後、『将門記』と豊田豊彦氏の名著『平将門の乱』を読みながら、共同幻想が生み出す「謀反人・怨霊・英雄」の姿、その己の亡霊と戦う真の将門に会えたような気がした。

## 参考文献

『将門記』 東洋文庫

『平将門古蹟考』 織田完之著 伊藤晃口訳版 崙書房

『平将門の乱』 福田豊彦著 岩波新書

『東国の兵乱とものふたち』 福田豊彦著 吉川弘文館

『武家の棟梁の条件』 野口実著 中公新書

『史跡探訪関東100選』 山川出版

『尾崎前山』 八千代町教育委員会

『八千代の文化財』 八千代町教育委員会

『平将門の関東独立構想はなぜ失敗したか』 武光誠著 歴史街道1997-2月号